

英国における生活道路と幹線道路の機能分化の面的対策に関する調査

国土技術政策総合研究所 正会員 ○大橋 幸子
 国土技術政策総合研究所 野田 和秀
 国土技術政策総合研究所 正会員 小林 寛

1. 目的

生活に身近な道路の交通安全を確保するためには、通過交通を担う幹線道路との機能分化が求められる。本稿では、生活道路と幹線道路の機能分化が比較的浸透している英国での対策を調査した結果を報告する。

2. 調査地域の概要

調査対象地域を英国のロンドン及びケンブリッジとした（図 1、図 2、図中の数字は次項以降で述べる対策箇所を示す）。ロンドンでは、主要な幹線道路が環状に整備されており、中心市街地から主要な幹線道路へ複数の幹線道路が接続している。ケンブリッジは中心市街地から放射上に幹線道路が伸びており、一部は主要な幹線道路へ接続している。本稿は、中心市街地から延びる幹線道路、これらに接続する生活道路、及び中心市街地内の道路に着目し調査した。

3. 面的で連続的な対策

調査した地域では、幹線道路から生活道路にかけて、生活道路の交通安全確保につながる対策が面的に実施されていた。

まず、幹線道路を通行するドライバーに対し、前方を右左折した場合にはハンプのある道路であることを伝える例が見られた

（図 3）。図の例は生活道路のエリア入口の約 200m 手前の地点であるが、前方を左折した場合にハンプが 3/4 マイル（約 1.2km）に渡って設置されている情報を示している。ある程度手前の地点で案内することで生活道路を通行しようと考えていたドライバーも経路を再考する余裕があると考えられる。我が国における生活道路や通学路でのドライバーへの注意喚起は生活道路のエリア内に設置される例が多いが、これはすでに生活道路に進入したドライバーへの注意喚起となるため通過交通の抑制につながりにくい。進入口で注意喚起している例もあるが、進入時点では経路の変更も難しい場合があると考えられる。これに対し、調査を行った地域では、表示による対策は主に幹線道路で行われていた。次に、生活道路の入り口部分の表示に着目する。入口部には、進入するエリアに速度や重量の規制があることが表示されている（図 4）。あわせて、交差点近くにハンプが設けられており、幹線道路ではないことを進入したドライバーが感じる事ができる工夫が見られた（図 5）。

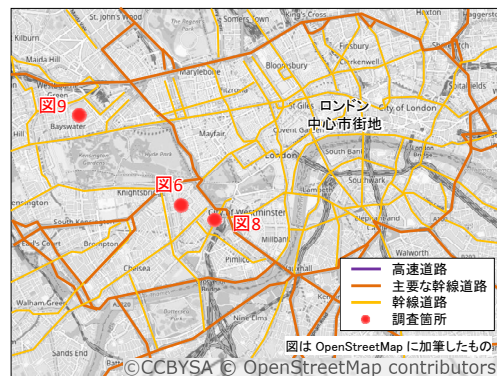


図1 ロンドン調査箇所

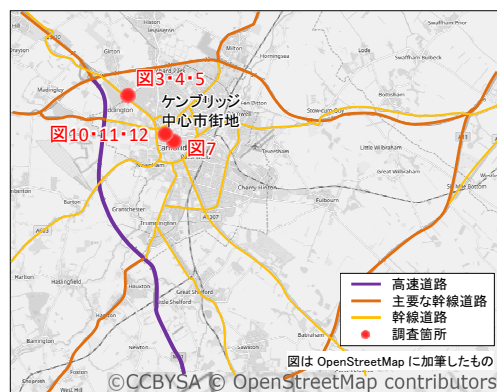


図2 ケンブリッジ調査箇所



図3 幹線道路からのハンプの注意喚起



図4 エリア入口での表示

キーワード 交通安全, 生活道路, ハンプ, 歩行者

連絡先 〒305-0804 茨城県つくば市旭1番地 国土技術政策総合研究所道路交通安全研究室 TEL 029-864-4539



図5 進入口近くのハンプの設置



図6 幹線につながる道路での連続的なハンプの設置



図7 エリア内の舗装の工夫



図8 エリア内のハンプ



図9 エリア内の路面の高さの変化



図10 ライジングボラード



図11 バリケード



図12 監視カメラ

生活道路のエリア内では、幹線道路に通じる道路には連続的にハンプが設けられており、区間にわたり車両速度を抑制するような構造となっている（図6）。

幹線道路に通じる道路からさらにエリア内の道路に入ると、連続的なハンプはあまり見られず、舗装の工夫などにより歩行者中心の道路である雰囲気を作り出している（図7）。一部では、歩道をハンプによってつなぐことで敷居のようにしたり（図8）、エリア内の道路の高さを高くして進入する際にハンプに乗るような形として別エリアと感じられるようにしたり（図9）という工夫も見られる。

4. その他の対策

その他、市街地では、歩行者優先のエリアを設け、ライジングボラードやバリケードで区分けしている例が見られた（図10、図11）。また、このようなエリアでは、監視カメラにより違法車両の進入抑制を図っている例も見られた（図12）。

5. まとめ

英国では幹線道路も含め面的に対策が実施されている例があることが分かった。我が国における生活道路対策は生活道路のエリア内で実施される傾向にあるため、今後、幹線道路から連続的に対策を行っていくことにより通過交通を抑制し機能分化をより実現できる可能性がある。特に、幹線道路側での表示など、幹線道路と生活道路の管理者が連携して面的に対策を進めていくことで安全が向上する余地があると考えられる。